

## 第 58 回 歴史リレー講座「古墳・寺・宮からみた斑鳩文化」 前園 実知雄氏 (R1.7.21)

古墳時代終わりの 6 世紀後半から 8 世紀にかけて日本という国が成立した頃、斑鳩はどんな政治的役割を果たしたのでしょうか。藤ノ木古墳 (6 世紀後半) の調査が始まったのが昭和 60 年 (1985)。私は同 63 年春のファイバースコープによる第 2 次調査と同年秋の石棺開棺調査に加わりました。その結果、大陸から伝わったとされる華麗な副葬品と共に青年 2 人の骨が発見され大騒動になりました。

聖徳太子が飛鳥から斑鳩宮に移り住んだのが 7 世紀初頭。藤ノ木古墳の調査結果は、その理由が「隠棲」というそれまでの見識を一変させました。太子の転居以前に先進的な文化の母体がすでに斑鳩にあったならば、政治から距離を置くどころかむしろ積極的に進出したと考えられます。この辺りには他にも古墳が点在しており、なかでも重要なのが藤ノ木古墳北方にある民家の庭で発見された春日古墳。調査の結果、石室を備えた未盗掘古墳と分かりましたが、肝心の時期が藤ノ木より前なのか後なのか…。いずれにせよ古代史を考えるうえで見逃せない古墳です。測量はすでに終了しており、近い将来詳しい調査が行われるはずで

若草伽藍 (創建当時の法隆寺である斑鳩寺) には金堂はあるものの講堂は無いため、未完成のまま焼失 (670 年) しました。ここから発掘された瓦は軒平瓦のきひらといって日本で発明されたものです。飛鳥から続く太子道 (筋違道) の傾斜を考えると、太子が若草伽藍以前に造った斑鳩宮と若草伽藍は東西に並んでいた可能性があります。その斑鳩宮と考えられる現在の夢殿からも同様の瓦が見つかりました。

では、太子亡きあと 7 世紀終わりから 8 世紀にかけて現在の法隆寺を再建したのは誰でしょうか。西院伽藍の瓦に似た特徴的な瓦は周辺の寺から西日本にかけて多く見られ、しかも法隆寺の荘園と瓦の出土分布は重なることから、再建には荘園が深く関わっているように思えます。太子が推古天皇に法華経を講じた岡本宮ほうきじの場所は法起寺に相当し、発見された遺構の向きは太子道の傾斜角度とも一致します。戦時中に火災に遭い、その後復元された法輪寺にも法起寺と同じような遺構が見られます。『日本書紀』に「蘇我氏が仏教を取り入れた際に石川精舎を造った」とあるように、飛鳥時代の寺は豪族などの屋敷内に造られた舎宅寺院のため、地下には必ず前身遺構が存在します。

また、中宮寺跡復元図からは中宮跡を寺に造り替えたことが見てとれます。中宮寺は室町時代に焼けたため仏像とともに若草伽藍東院横に仮住まいしたのち、そのまま現在の中宮寺となったようです。ここから出土したさまざまな種類の瓦は百濟や高句麗の影響を強く受けています。斑鳩をとりまく王寺町の西安寺跡や三郷町の平隆寺、河合町の長林寺などから出土している瓦も同様です。

587 年、仏教の受け入れをめぐって物部氏との戦いに勝利した蘇我氏は、物部氏の勢力範囲だった河内の八尾から生駒を越えて亀ノ瀬、斑鳩から天理いそのかみの石上までを手中に収めました。ならば、太子が斑鳩へ進出した真の理由は、難波に通じる大和川を有する先進文化地域、斑鳩を新たな政治拠点に選んだためと考えるのが妥当です。太子らが目指した新たな律令国家の成立には大陸との不断の交流が不可欠だったからです。もし彼が皇位を継いでいれば、斑鳩が都になっていたかもしれません。

さて、藤ノ木古墳に葬られた 2 人の青年はいったい誰なのでしょう。気になるのは、石室や石棺などいくつかの点で「急ごしらえ」の感が否めないことです。私の脳裏には穴穂部皇子 (太子の叔父) や、物部派の宅部皇子 (宣化天皇の子) らの無念の姿が浮かび上がります。蘇我派の穴穂部皇子は物部派に担ぎ出されて天皇候補になるも結局は馬子に殺害され、宅部皇子も同時期に暗殺されています。志半ばで斃れた彼らが夢見た新しい国造りは半世紀後、天武・持統天皇が造った藤原京まで待たねばなりませんでした。